

元稲荷古墳後方部後端の調査

所 在 京都府向日市向日町北山64-5ほか 調査期間 2008（平成20）年12月8日～2009（平成21）年2月28日予定
調査所管 向日市教育委員会 調査機関 財団法人向日市埋蔵文化財センター（担当 梅本康広）
調査協力 向日神社 京都府乙訓土木事務所 向日台団地

1 はじめに

元稲荷古墳は京都盆地の北西部を流れる桂川右岸の向日丘陵上につくられた古墳時代前期の前方後方墳です。古墳の名称はかつて後方部の上方に稲荷社が祀られていたことに由来します。この古墳を最初に紹介したのは梅原末治氏（京都大学名誉教授）で、1919（大正8）年の京都府史蹟勝地調査会がおこなった踏査で確認されました。当時は現状の観察だけであったため前方後円墳と考えられていました。

第1次調査 高度経済成長期に入ると向日町の人口増加に伴い上水道の需要が高まり元稲荷古墳の後方部に配水池が造られることになり、1960（昭和35）年3月に墳丘と埋葬施設の調査が京都大学によって実施されました。その結果、墳丘測量によって墳形が前方後方墳であることがわかり、被葬者を埋葬する施設として後方部には^{たてあなしきせつかく}堅穴式石槨が造られていることがわかりました。石槨は南北に向き全長5.6m、北端幅1.3m、南端幅1.0m、高さ1.9mの規模を有しています。その構造は木棺を設置するための^{ねんどかんしょう}粘土棺床を築いてそれを取り囲むように板石を積み上げ、壁面の背後には控えに板石を置き礫を充填して最上面に大きな礫を全面に施して11枚の天井石が被せられています。内部は大がかりな盗掘を受けていましたが、刀剣、槍、鏃、斧、刀子、鋤・鋤先、壺形土器、特殊器台形埴輪などの細片が出土しました。

第2次調査 1970（昭和45）年7月には前方部の保存目的の調査が京都大学によっておこなわれました。前方部の遺存状況は良好で墳丘裾の範囲や構造が明確になり、墳頂には壺形埴輪を載せた特殊器台形埴輪が長方形の区画内に6～7個体樹立していたことがわかりました。墳丘の各段に円筒埴輪の大量配列がはじまる直前の様相をもち、初期の堅穴式石槨の構造を備えるなど畿内の前期古墳の中でも最古の前方後方墳のひとつとして重要性が確認され、地元からの保存要望を受けた向日町（当時）が古墳全体を買い上げ将来にわたってのこされることになりました。その後、前方部側は勝山公園として整備されました。

第3・4次調査 2006（平成18）年からは向日丘陵古墳群の保存活用を主目的として元稲荷古墳の範囲内容確認調査が始まりました。過去2年間の成果としては後方部東側の遺存状況と範囲を明らかにすることができました。なかでも、後方部の平面形態が逆台形気味に造られていることやくびれ部に重厚な礫敷が施されていることがわかったことは大変興味深い成果といえます。

第5次調査 今年度は後方部後端側の範囲を確認する目的で着手しました。調査地付近の現況は北面する崖地となっています。これは、1961（昭和36）年に名神高速道路の建設に伴い盛土の採取地となり丘陵地形を大きく抉る形で土取りが行われたため、その範囲は古墳の裾付近まで及んでいます。それ以前の旧地形については第1次調査の測量図から窺うことができ、後方部後端の西半側は竹藪の改変ですでに削り取られていたことがわかります。また、古墳との隣地境界に沿って溝状の掘り込みが設けられていました。後方部の北東隅角については第3次調査ですでに削平されて遺存していないことが明らかにされています。



図1 元稲荷古墳の位置 (1/5000)

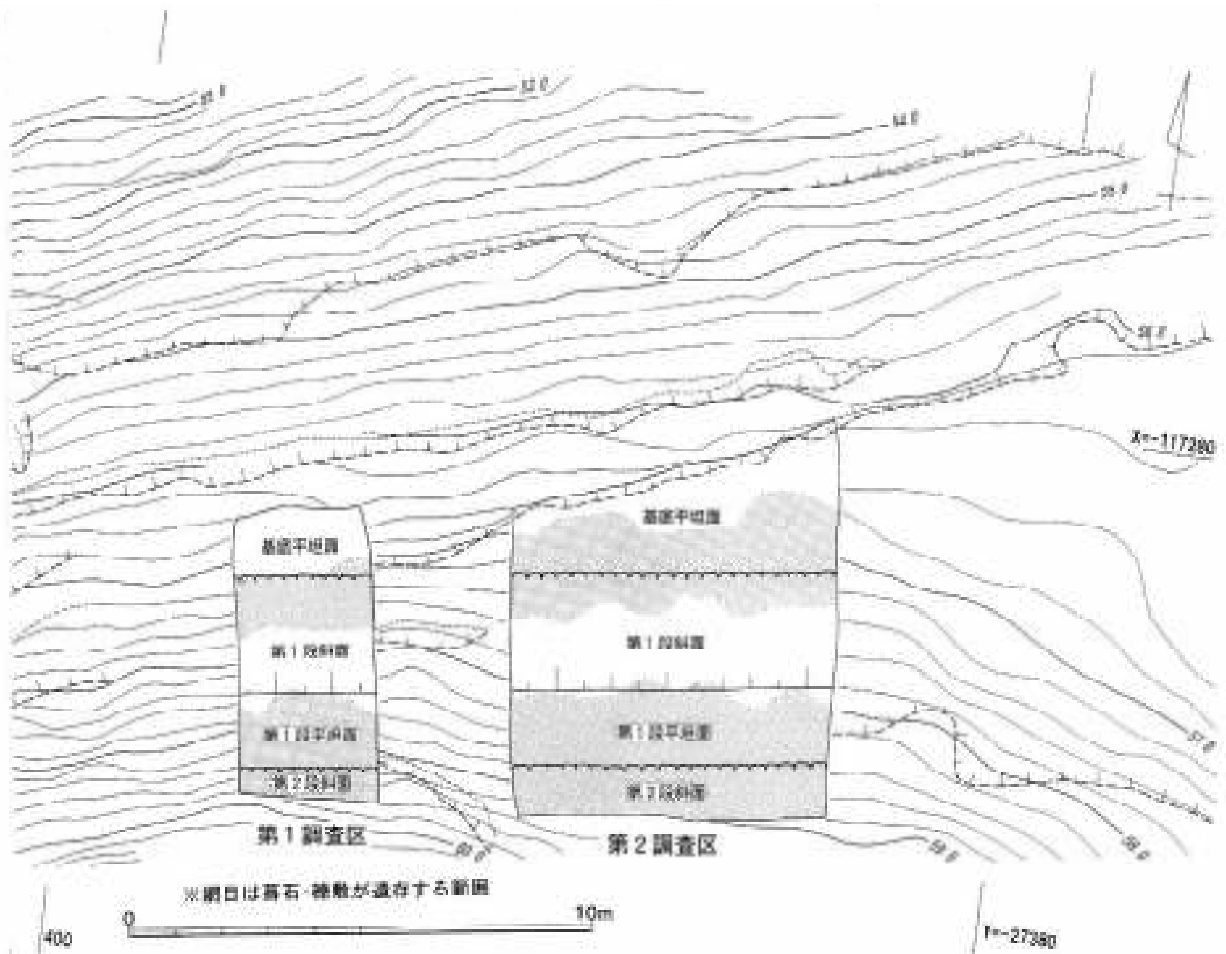


図2 後方部後端検出状況 (1/150)

調査区の設定にあたっては、4次に及ぶ過去の調査成果を検討して古墳の中心線を推定復原し、これに沿った位置に第1調査区(3×5m)を、また後方部北東隅角付近の人工的な改変部分を現地形の観察からその範囲を特定しこれを避ける形で第2調査区(7×5m)の位置を設けました。

調査の結果、後方部墳丘の基底平坦面、第一段斜面、第一段平坦面、第二段斜面裾までの範囲を検出することができました。以下には二つの調査区の成果をまとめて記述いたします。

2 調査の成果

葺石 使用石材の大きさがほとんど拳大であることから崩落や変形している箇所が多く、構築当初の状態を残した箇所は少ない状況です。

第一段斜面の葺石は基底部に大形石材(根石)を使用せず、やや長細い拳大の礫を斜面に直交させて積み重ねる小口積みという方法が裾位置からおこなわれていました。石の並びには規則性が見出せず、葺き上げの作業単位の把握が困難です。葺石の背後には基底部から高さ0.4mの範囲に暗茶色粘土が充填されています。礫は背後に一石程度詰めるだけでほとんどが粘土になります。葺石面の傾斜は基底から約0.3mの高さまで急勾配で立ち上がり、標高57.0m付近で緩やかに変化しています。第1調査区で顕著に見られ、本来の構築状況を示しているものと思われます。

第二段斜面では裾位置に根石をしっかりと列べています。その上にやや大ぶりの石を2～3石のせてから拳大の礫を小口積みしていきます。とくに第1調査区の遺存状況は良好で、区画石列と見なせる縦方向に目地の通る箇所があります。一方で第2調査区の葺石は変形や崩落があるためか、小口積みが不明瞭になっています。背後には礫が多く備わり、小口積みによって重厚に築かれています。これが裏込めになるのか葺き足したものであるのか判断が難しい状況です。

礫敷 基底平坦面では第一段斜面裾の外側に根石相当の石材が置かれていたり、扁平な面を上に向けた石材が多く使われています。裏込めの土と同じものを段丘面上に施して、重ね置きせず敷いて小ぶりの石材を隙間に詰めていたと思われます。その範囲は明確にできませんが、少なくとも裾位置から外側に1mほどは広がりをもっていたと判断されます。

礫敷と葺石の境界は根石が無い目地が通らず不明瞭になっている印象を受けます。両者の噛み合う場所がある一方で、礫敷から葺石へ順に置かれた状況がわかる箇所もあり、これらは一連の構築で施工されていたと考えられます。

第一段平坦面でも同じ傾向が窺えます。また、仕上げの葺石が施される際には、礫敷から連続して積み重ねられており根石はこれにより「埋め殺し」となって見えなくなっています。この礫敷面は現状の幅約1.6mで内側へ上り勾配になっています。

葺石・礫敷の石材はチャートと砂岩が主体で、その採取地は向日丘陵西側斜面に沿って流れる小畑川の河床に求めることができます。

段築成 墳丘各所の検出面の標高は基底平坦面 56.60～56.70 m、第一段斜面上端 57.70～57.80 m、第一段平坦面と第二段斜面の境界付近 57.90～58.00 mになります。このことから後方部後端側の第一段目の高さは1.10～1.20 mで、かなり低くつくられていたことがわかります。

第一段の斜面と平坦面の境界付近から盛土が始まり、その直下には古墳造営以前の弥生時代後期の遺物包含層が堆積しています。したがって、第一段目の構築にあたっては丘陵地形を削り出して成形していたと考えられます。

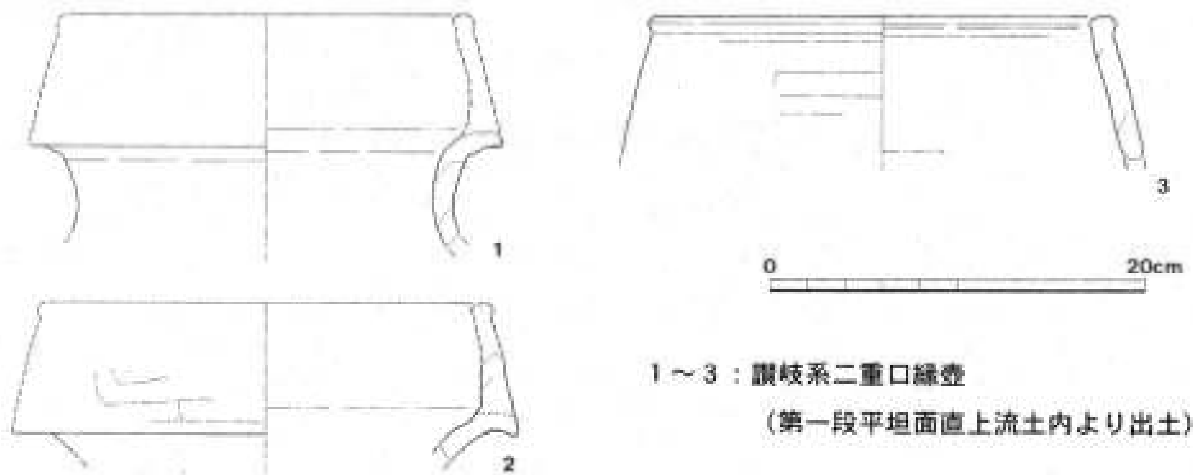


図3 元稲荷古墳第五次調査出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 墳丘上部の盛土と葺石が崩れ落ちて第一段平坦面を覆う流土の中から特殊器台形埴輪と讃岐系二重口縁壺の細片が出土しました。特殊器台形埴輪は竪穴式石槨の盗掘孔内からも数片確認されましたが、今回多数の破片が出土したことにより後方部墳頂にも前方部と同じような配置があったことが確定しました。赤色顔料の塗布が窺える突帯片や鋸歯文が線刻された破片などが見られます。

讃岐系二重口縁壺は複数個体識別が可能で、頸部から外湾する一次口縁部を有し、その上端面の内側に内傾する二次口縁が付けられています。色調が暗茶色で黒い微粒子状の角閃石や四角い長石を含むのが特徴です。葬送儀礼にかかわる土器として墳頂部に置かれていたものと推測されます。このタイプの讃岐系二重口縁壺が畿内の前期大形古墳の祭祀用土器として使用された例は他になく、元稲荷古墳の被葬者と讃岐の有力者との親縁な関係性を想起させます。

3 調査の意義

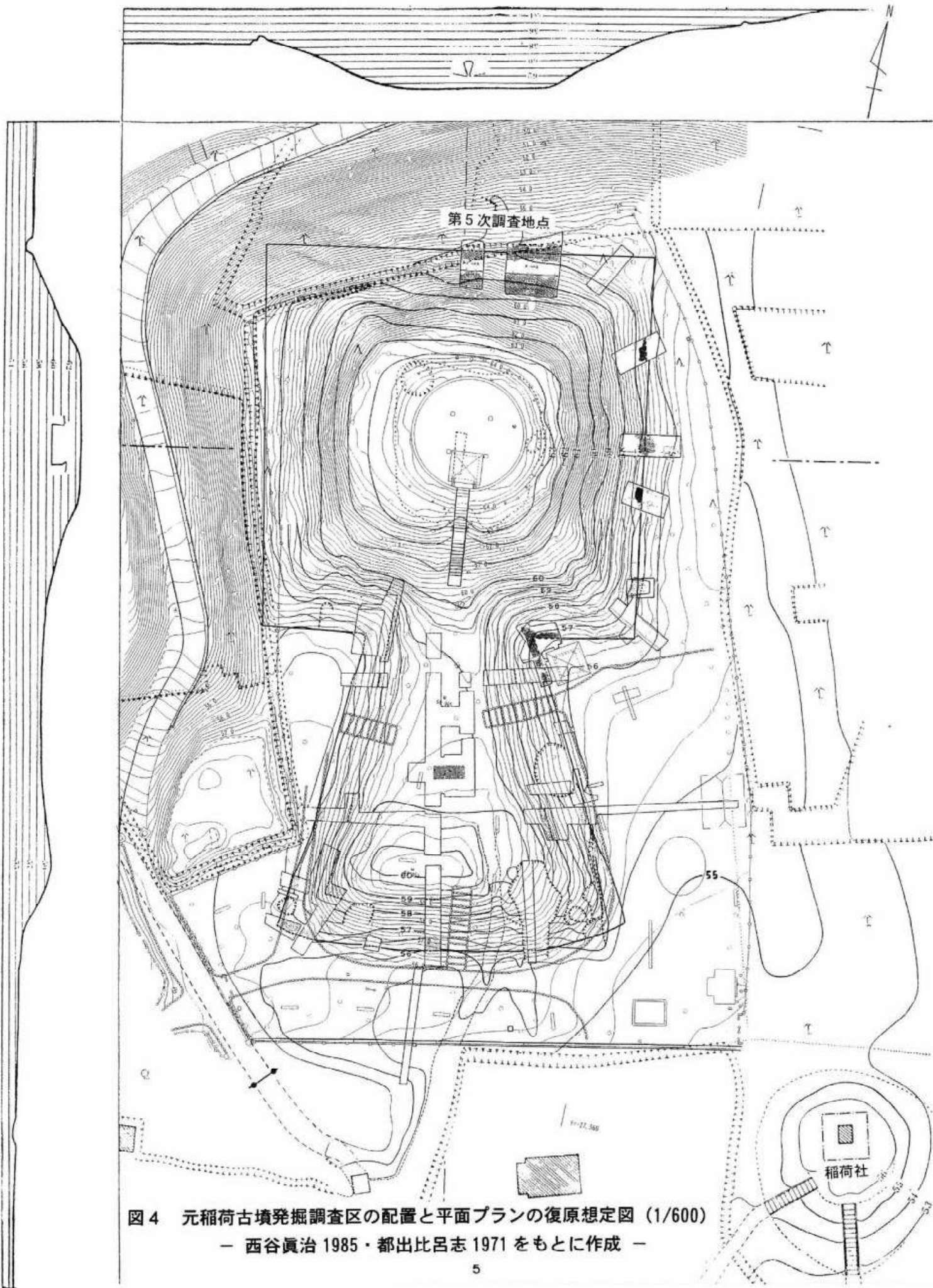
① 墳丘の規模が確定した

後方部後端（北端）の墳丘裾位置がはじめて確認され、後方部の長さが約51mであることがわかりました。第2次調査で確認された前方部前端（南端）裾位置までの距離は約92mであり、この数値を墳丘の全長として把握することができるようになりました。

後方部は三段に築成され、第一段目は丘陵地形を削り出して造られています。前方部は二段でほとんどが盛土により築かれています。墳丘各部位の計測値は以下の通りです。

墳丘長約92m、後方部長約51m、後方部北辺幅約51m、後方部南辺幅約49m、後方部高 約7m
 前方部長約41m、前端幅約46m、前方部高約3m、くびれ部幅約23m

元稲荷古墳は前方後円墳が巨大化し定式化した直後につくられた大形前方後方墳として最古の一群に属します。従来より桜井市箸墓古墳のおよそ3分の1規模に相当し墳丘築造の設計企画に相互関連性があると指摘されていました。また、神戸市西求女塚古墳（98m）は近似した規模を有し、さらに2分の1規模にあたるたつの市権現山51号墳（42.7m）が存在します。両古墳には最古相の中国製三角縁神獣鏡が副葬されており、後者については特殊器台形埴輪が供伴しています。箸墓古墳に極めて近い時期の築造であることが想定されます。元稲荷古墳についてもそれらの古墳に遅れることなく造られたと見なされます。これらが分布する地域は中小規模のものを含めて畿内から吉備までの範囲に限られており大形古墳出現期の前方後方墳の性格を反映した興味深い在り方を示しています。



② 出現期の大形前方後方墳の外観が判明した

上述した古墳のなかで墳丘の構造や外表施設の詳細がわかった事例は少なく、わずかに天理市下池山^{しもいげやま}古墳と西求女塚古墳で様子が窺えていたに過ぎませんでした。

今回の調査で元稲荷古墳後方部墳丘下半の様相が判明したことで、過去の調査成果と合わせ出現期の
大形前方後方墳の墳丘構造のほぼ全容が解明できたこととなります。

その特徴は、①墳丘斜面に葺石、平坦面には礫敷を施して古墳全体を礫で覆う、②葺石には拳大の礫が多用される、③斜面裾部には葺石の背後に礫か粘土が厚く施される、④後方部第一段斜面裾は根石の使用が無く基底平坦面の礫敷から葺石までを一連の作業として施工される、⑤根石の使用は後方部では第二段斜面裾からになり、前方部では各段でみられ長細い石材を横置きする、⑥くびれ部後方部側の第二段斜面裾は貼石状に石を配し、基底部には重厚な礫敷が施される、などがあげられます。

古墳の場所々によって葺石の施工状況が異なり、古墳全体を通じて一貫性は見受けられません。それは粒径が小さい石材しか採取できなかったことと関係しているのかも知れません。それでも小口積みを丁寧におこなっており、使用された石材の総量から見て相当の労働力がかけられていたことは間違いありません。

③ 葺石の起源に迫る墳丘の表飾・構築

古墳の外観イメージは、まるで「石の山」のようです。とくに、基底平坦面の礫敷は出現期の大形古墳の中ではじめて確認されるものです。墳丘全体を古墳の周縁から石で覆う構築方法は大形古墳の出現当初にはじまる要素であったと評価することができます。このことは葺石の起源に迫る重要な問題と考えられます。

それではこのような墳丘表飾・構築の方法はどこに系譜を求めることができるのでしょうか。現在知られている出現期の大形古墳のなかで葺石の最初の事例としては天理市中山大塚古墳や桜井市ホケノ山古墳などをあげることができます。いずれも大形石材を用いて裾を築き、小口積みによって斜面を葺き上げ、背後には重厚な裏込めを備えています。その構築技術は葺石の出現段階ですでに確立しています。元稲荷古墳は大和の大形古墳の技術系譜をひくものと判断されます。

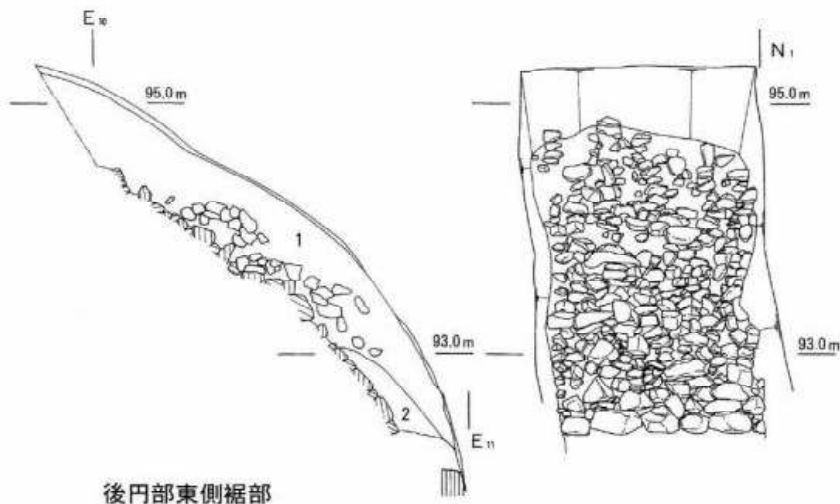
一方、ほぼ同じ頃に造られた香川県高松市鶴尾神社4号墳は規模は小さくなりますが、墳丘裾に石列を配し斜面には段築を設けるなど墳丘のすべてが積石によって築かれています。大形古墳の場合は盛土によって造られているため墳丘の表面に石を被せる格好となっています。いずれの場合でも、墳丘構築の基本理念は「石の山」に仕上げるのが指向されていたと思われます。

その背景は前方後円墳が飛躍的な変容を遂げていく動きと呼応しているように思われます。墳丘の巨大化、埋葬施設・棺の長大化、副葬品の多量化・朱の多用といった神仙思想の採用などは中国皇帝陵をはじめとする東アジアの王陵に遡源を求めることが可能であり、それらの造形的模倣と思想的啓発を受けて倭国独自に考案され創出された可能性が高いものと考えられます。

墳丘を「石の山」に築くという発想も同じ背景から生れてきたものと判断されます。元稲荷古墳の葺石・礫敷の在り方から見た古墳の外観イメージはこのことを裏付けさせる成果になるかもしれません。

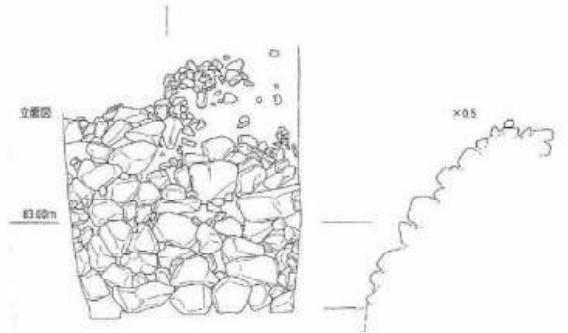
④ 祭祀用土器にもちいられた讃岐系二重口縁壺

今回の調査で墳頂の祭祀に使われた土器と考えられる讃岐系二重口縁壺がはじめて出土しました。前期古墳では他地域から持ち込まれた土器が確認されることがあります。古墳被葬者がどの地域とつながりをもっていたかを雄弁に語る資料になり大変興味深く思われます。



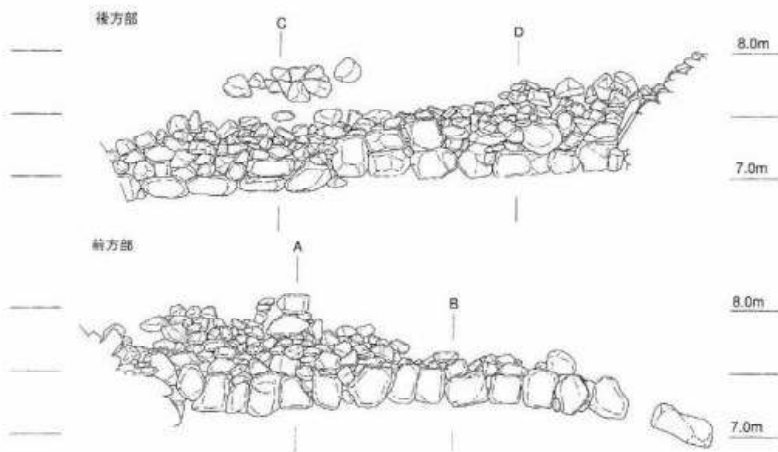
後円部東側裾部

1. 中山大塚古墳 (榎原考古学研究所 1996)



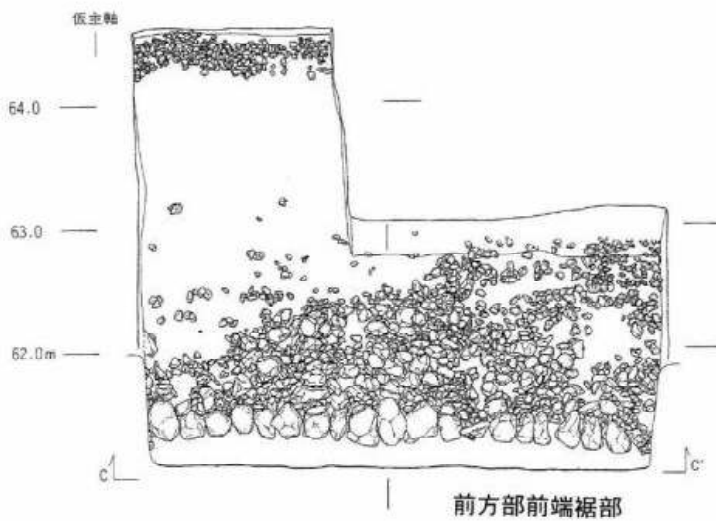
後円部北東側裾部

2. ホケノ山古墳 (榎原考古学研究所 2008)



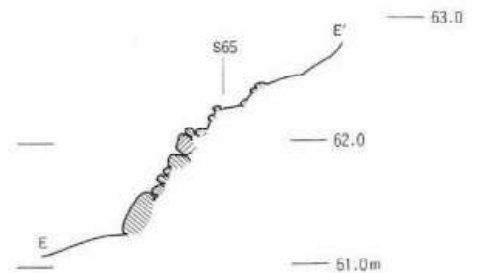
くびれ部南側裾部

3. 西求女塚古墳 (神戸市教育委員会 2004)



前方部前端裾部

4. 五塚原古墳 (立命館大学文学部 2003)



0 2m

図5 大形前方後円墳出現期の墓石立面・断面図 (1/60)

前期古墳では他に箸墓古墳（瀬戸内系二重口縁壺）、下池山古墳（東海系S字状口縁台付甕）、ホケノ山古墳（東海系二重口縁壺）、平尾城山古墳（山陰系鼓形器台）、壺井御旅山古墳（讃岐系二重口縁壺）、西求女塚古墳（山陰系大形二重口縁壺、鼓形器台）、処女塚古墳（山陰系大形二重口縁壺、鼓形器台）、権現山51号墳（吉備系二重口縁壺）などが知られています。

元稲荷古墳では吉備（特殊器台形埴輪）と讃岐に由来する遺物が確認でき、古墳定型化段階の前方後方墳の分布傾向とともに東部瀬戸内地域との親縁な関係性を想起させます。

⑤ 元稲荷古墳出現の背景

前方後円墳は奈良県東南部、現在の天理市から桜井市にまたがる地域で誕生し、その出現時期は3世紀前葉まで遡る可能性が高まってきました。纏向石塚古墳をはじめとする墳丘長100m級で揃う纏向古墳群の成立と展開が巨大古墳の出現過程を考える上で大変重要な問題になってきます。この段階の埋葬施設のひとつにはホケノ山古墳（全長約80m）の事例から木槨が採用されていたことが推測されます。

3世紀中葉になると中山大塚古墳（全長132m）にみられるように、前方部がさらに発達し、長大な木槨を備えた竪穴式石槨が採用されます。また、吉備地域に由来する特殊器台形土器が独自につくられ、墳頂祭祀の主要な土器として備わり、同時にそれが埴輪に転化して共伴し、その後大量に配列されていきます。ほぼ同じ頃につくられた箸墓古墳（全長約290m）では墳丘が巨大化して他の墳墓と隔離した規模を有するようになり、後円部が正円形に整い、多段築成となります。また、西求女塚古墳や権現山51号墳のように三角縁神獣鏡を代表とする中国鏡の多量副葬がはじまります。

中国皇帝陵の模倣や神仙思想の受容、鏡・大刀・甲冑の入手など中国王朝との交流によって得られた刺激がもとになって倭の政治支配に変革があらわれ、各地域の政治勢力を統合するための象徴的支配装置として前方後円墳が巨大化し定型化したと考えられます。

その後、桜井茶臼山古墳、西殿塚古墳、メスリ山古墳、行燈山古墳（伝崇神陵）、渋谷向山古墳（伝景行陵）などの大王墓級古墳の築造がこの地で約100年間つづけられます。こうした造墓活動と連動した前期古墳群の形成が山城盆地の北西部、桂川右岸の向日丘陵上で展開していきます。畿内ではほかに、高槻市弁天山古墳群、交野市森古墳群、柏原市玉手山古墳群があります。前二者は淀川水系、後者が大和川水系に沿って立地しており、王権が重視した地域（権力）であることをうかがわせます。

向日丘陵古墳群は丘陵の頂部附近に分布するひとつの首長墳群のまとまりを捉えたもので元稲荷古墳、北山古墳、五塚原古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳、伝高島陵古墳、御塔道古墳が基軸になります。さらに、芝山古墳、恵美須山古墳、天狗塚古墳などが随伴する可能性が考えられますがこの古墳群の基本構成は階層構造をとらないと判断されます。ところで、向日丘陵上で最初につくられた古墳として元稲荷古墳が有力と見なされていますが、五塚原古墳もかなり古い特徴をもっており両者の新古は決めがたい状況にあります。前方部の段築成が一段でくびれ部の幅が16mと極端に狭い上、高さは2.1mしかない五塚原古墳に対し、元稲荷古墳は二段築成でくびれ部幅が2.2m、高さは約2.5mになります。また、五塚原古墳の葺石は拳大の礫を多く使って小口積みする点では元稲荷古墳と共通していますが、裏込めを備えず各段斜面裾の根石に長細い大きな川原石を縦置きして古墳全体を通じて一貫した構築方法が採られるなど違いが際立っています。両古墳の築造時期はかなり近接しているものと考えられます。

元稲荷古墳は箸墓古墳を頂点とする初期「倭王権」の政治秩序にしたがって3世紀後半につくられ、その被葬者は王権に参画しながらも政治経済的に自立した桂川流域を支配拠点に置いた有力な首長であったと考えられます。前方後方墳という墳形はそのような政治階層的立場を表象したものと思われる。